

イタリアの音楽科教育における一考察
 ～小・中学校における歌唱指導の視点から～
A Study in the Italian Music Education
 ～From the point of the teaching of singing in School Programs～

瀧明 知恵子
 Chieko Takiaki

キーワード：音楽科教育、歌唱・合唱、発声法、学校教育

1. はじめに

我が国においては、ここ何年も学校現場では、いじめ、不登校、暴力行為等の問題が取りあげられ、社会問題ともなっている。しかしながら、調査研究で訪れたイタリアにおいては、そういった児童生徒の問題はクローズアップされていないのである。在イタリア大使館における懇談会で、イタリアでは学校で過ごす時間が短いこともあるが、日本の子ども達は、イタリアに比べると、様々なストレスを抱えているからではないか、といったことが話題となった。筆者はこれまで心の豊かさや、情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく大切さとともに、学校教育における音楽科の果たす役割を強く実感してきた。生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成に欠かせないものである。

日本学校音楽教育実践学会では、課題研究として行ってきた「生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム」の実践検証を通し、これからの音楽の授業像を具体化していくことを重要課題としている。その際、諸外国の音楽授業を調べ、国際的な視野を持つことを重視し、2006年より5か年計画で「音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較」を設定している。カナダ、韓国、アメリカ、ドイツ、イギリスをめぐる、調査研究が展開し、日々の実践に様々な示唆を得るものとなっている。小島律子は「日本で生まれた音楽カリキュラムを世界の視座から検討することが、教師を育て、新しい授業を創造するよう機能していくことを期待する」¹⁾と述べている。

筆者自身はこれまで、イタリアの音楽科教育について調査研究してきた。他の先進国に比べ、イタリアの音楽科教育についての研究は少ないのである。機会を得て、この度、イタリア（ローマ）への2度目の学校音楽教育を実地調査することができた。イタリア大使館からローマの幼・小・中学校の一体型学校であるピステッリ校の紹介を受け、訪問することとなったのである。

歌唱・合唱をはじめとした音楽科教育に長年たずさわりの、学校教育における音楽活動の有用性を実感してきた筆者にとって、歴史的に長く西欧の音楽文化の中心となっていたイタリアの学校教育に触れることは大変意義深い体験であった。

この度、実地調査することができた内容を含め、イタリアにおける音楽科教育に焦点をあて、その実態を探り考察する。イタリアはオペラ誕生の地であり、ロッシーニ、ベッリーニ、ヴェルディ、プッチーニなど大作曲家を多

数生み出した国である。専門教育機関としての音楽院などが充実しており、諸国の音楽を志す人たちが留学を希望する地である。そういった多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出したいと考える。

2. 日本とイタリアの音楽科教育

(1) 音楽科教育の変遷

先行研究を手がかりにイタリアの音楽科教育課程の「歌唱」の誕生から現在までの歴史の変遷をたどり、イタリアの国の目指す音楽科教育の方向性の移り変わりを明らかにすることにより、その特色を探る。大野内 愛は「歌唱」の誕生から現在まで、音楽科という教科の捉え方から、4つの時代に分けている。²⁾

第1の時代は、1894年からであり、愛国の精神の育成という政治的目的への手段の時代であったと言える。「歌唱」が教科として初めてプログラムに組み入れられている。中学校では1968年である。

第2の時代は、1923年からであり、認知的内容が重要視される学問としての性質が強かった時代である。歌唱教育は芸術教育に含まれ、音楽の理論的な基礎を含むものとなる。精神的な訓練として理解するという考え方から音楽そのものを学ばせる考え方になり、教科としての音楽教育の始まりである。

第3の時代は、1945年からであり、精神教育の手段の時代と言える。プログラムにおいて「歌唱」は教科として独立している。「歌は精神教育の1つである」と明示されており、歌唱活動を精神教育のための手段として捉えていることがわかる。1955年では音楽理論の記述は無くなり、歌唱についても具体的な記述は無い。子どもの個性の育成を教育の目的に考えている。

第4の時代は、2007年からであり、音楽は生活に密着したコミュニケーションツールとして考えられた時代である。「幼児学校および第1過程の教育カリキュラムにおけるプログラム」という名称がつけられている。教科間の領域の横断的な学習を行うため〈言語・芸術・表現領域〉〈歴史・地理領域〉〈数学・科学・技術領域〉の3つにまとめて示している。個としての人間形成を行っていくことがプログラムの理念として述べられている。コミュニケーション媒体としての音楽を、言語として捉え、その音楽言語について、学年が上がるにしたがって、「基礎的要素の学習」から「基礎的構成要素の学習」、「重要な要素構成の学習」へと展開されていることがわかる。

(2) 日本とイタリアの教育制度

イタリアの学校制度は、日本が6-3-3-4制であるのに対し、5-3-*5-*3制である>(*では、専攻によっては修学年数が必ずしもこの通りとは限らない。)

学期制度は、主に日本では3学期制だが、2学期制をとっており、年度は、9月～6月となっている。日本の文部科学省・各都道府県教育委員会にあたるイタリアの行政機関は、教育・大学・研究省(初等～中等教育管轄部-旧「教育省」)(高等教育管轄部-旧「大学・研究省」)である。

義務教育においては、日本では、小学校6年(7歳～13歳)、中学校3年(13歳～16歳)であり、イタリアでは、教育体系は大きく2つの課程(サイクル)に分けられている。第1課程には初等学校(Scuola Primaria、5年)と前期中等学校(Scuola Secondaria di Primo Grado、中等学校相当、3年)が、第2課程には後期中等学校(Scuola Secondaria di Secondo Grado、高等学校相当、4～5年)が属している。なお、第2課程の後期中等学校には、文系/理系普通高校、芸術高校、技術学校(専門養成学校)等があり、専攻体系により修学年数が異なる。第1課程は全課程を通じて義務教育、第2課程については最初の2年が義務教育として定められている。ただし、教育権保

護の観点から、「権利・義務」教育という拡大概念が論じられるようになってきており、全ての児童・学生が18歳までに卒業・修了等の資格を得られるよう広く教育の機会均等化を図ることが指針とされている。

教育政策においては、以前は国が各学年の指導内容を示していたが、現在は何年生で何を教えるかは各学校の裁量であり、達成度を診断するようになっている。³⁾

(3) イタリアのカリキュラム

初等学校は、週当たりの授業時間数には、24時間、27時間、30時間、40時間の4つの選択肢があり、入学手続き時に希望時間数を申請するようになっている。前期中等学校：週当たりの授業時間数には、30時間または36時間（最高40時間まで延長可能）があり、入学手続き時に希望時間数を申請する。1クラスは23名～25名である。通常、文書化された校則や制服はなく、子供の自主性に任されている。

初等・前期及び後期中等学校における生徒の学業成績評価は10段階で行われ、6に満たない者は落第となる。また、学業成績に加え、素行に対する評価も行われる。⁴⁾

イタリアでは日本の学習指導要領に相当するものとして、教育省による「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」（幼稚園、小学校、中学校）がある。このカリキュラム指針を基盤とした教育がなされているが、学校の裁量の幅が大きくなっている。

「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」⁵⁾

2012年9月版 教育省

文化、学校、人

- ・ 新たな局面における学校
- ・ 一人一人の中心性
- ・ 新たなシチズンシップのために
- ・ 新たなヒューマニズムのために

一般目的

- ・ 学校、憲法、ヨーロッパ
- ・ 生徒のプロフィール（修了時に到達していることが望ましい生徒像）

カリキュラムのオーガナイズ

- ・ 指針からカリキュラムへ
- ・ 領域と各教科
- ・ カリキュラムの継続と統一性
- ・ 諸能力の発達のための中間目標
- ・ 学びの諸目的
- ・ 評価
- ・ 諸能力の認定
- ・ みんなの、そして一人一人の学校

教育コミュニティ、専門的コミュニティ、シチズンシップ

*各学校はこのカリキュラムをベースに運営するが、それ以外に学校自身のカリキュラム（Piani di Offerta Formativa

「育成提供プラン」：音楽、演劇、運動活動など）を製作することで、カリキュラムをより豊かにし、特徴を加えている。

イタリアのカリキュラム指針には、育成される基礎能力を明確に定義づけ、それを実践へと展開する一貫した理念が示されている。音楽科の理念としては次のように明記されている。

音楽：

人間の経験の基礎であり普遍的要素を成す音楽は、協力性や社会性促進へのきっかけ、楽器知識の習得、創造性と共有能力の発揮、コミュニティに属する感覚の発展、さらには異なる文化間の相互作用にも適しており、象徴的な位置を占めている。

音楽教育の習得は、実技と理論から構成され、学校教育においては二つの側面を持つ。

・合唱や演奏など、音を用いた作品製作
 ・関連するイベント、現代や過去の作品を通じて、個人的、社会的、文化的意義の構成の意識的な享受を促す
歌唱、楽器演奏、創造的製作、聴くこと、理解や評論の熟考は、各々の音楽性の発展を促し、パーソナリティの感知-動力要素、認知要素、感情的-社会的要素の融合を助ける。また、困難を事前に防ぐことを可能にする精神身体的健康に貢献し、年齢によって変化する要求、希望、疑問、特徴に応じていく。特に、皆で音楽を学ぶという経験を通して、各自が楽譜を読み書きすることが可能になり、またその時に思いついた行動と思考をもとに即興で音楽を作ることができる。

2012年9月版 教育省より一部抜粋

*下線は、筆者による。

3. ベル・カント唱法について

18世紀にイタリアで完成されたベル・カント唱法は発声法の歴史におけるひとつの頂点とみなされている。発声学の聖典と呼ばれる「singen」の著者フレデリック・フースラーは「美しく滑らかに結ばれた歌い方」と記し、また「たまたま著しく高められた美学的要求だけによって生じたのではなく、この理想的な歌声の概念は、同時に歌うためには発声器官でまもられなければならない生理的法則と、きわめて正確に合致したのである。」⁶⁾とも記している。筆者自身、大学時代、音楽学部において、ベル・カント唱法を学び、呼吸法や発声法といった正しいテクニックが如何に重要であるかを体感してきた。

ベル・カント唱法とは【b e l c a n t o】〈ベルカント〉 イタリア語で『美しい歌』という意味で、イタリアの伝統的な歌唱法である。ベルカント唱法では下腹部を徐々に押し上げながら、横隔膜を上へあげていき、喉に無理なく低音から高音まで、気持ちよくのびやかに歌える方法である。ベル・カント唱法は身体に余分な力が入っていない状態で腹式呼吸を行ない、自然の生理に逆らわない発声法と言える。

ベル・カント唱法は別名、母音唱法とも呼ばれる。ドイツ語とイタリア語の発音の違いも、発声に大きな影響を与えている。まず、ドイツ語では子音は母音と同じぐらい重要なものに対し、イタリア語の子音は軽く、すばやく発音し、母音の発音する場所は鼻腔で、喉の状態は母音によって変化させない。すなわち母音と同じ音色、同じポジションで横につながり、まるで歌うように発音するのである。だから、イタリア語の歌を歌う時は大きなエネルギーを必要とせず、身体のバランスで歌えるのである。

ロッシェーニは「イタリアのもたらした最も美しい賜物の一つであるベルカント」とも述べている。

4. イタリアの音楽科教育の現況 ～実地調査を通して～

(1) 実地調査の概要

①訪問先 ピステッリ小学校（幼・小・中学校の一体型学校）

Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli"

Monte Zebio 33, Roma

Prof.ssa Brunella Maiolini（校長 ブルネッラ・マイオリーニ）

在イタリア日本大使館（ローマ）

②訪問日 2015年9月（1回目2014年9月）

③訪問目的

- * イタリア（ローマ）の小学校・中学校の音楽科教育について、公教育ではどのように行われているのか。カリキュラム、授業内容などについて調査し、資料収集する。
- * 音楽科教育について、意識調査、聴き取り調査する。
- * 授業参観・日本の心の歌＜童謡・唱歌・わらべうた＞の紹介・交流授業を行う。

(2) 意識調査の概要

2回目となる調査をより充実させるため、イタリアの児童・生徒・保護者等に向けた音楽教育に関する意識調査を試みた。文科省が日本の小学生に実施した内容の一部を、翻訳し協力を得た。

ピステッリ校の小学生（n=78）・保護者（n=39）の「音楽教育」に対する意識の実態を把握する目的で、2015年9月25日～9月28日に実施した。

平成20年度「特定の課題に関する調査」⁷⁾ 【小学生】 【保護者・教師】 アンケート

(1) 音楽の学習が好きですか。

(1) 子どもたちは、音楽の学習が好きですか。【保護者・教師】

(2) 音楽の学習は、大切だと思いますか。

(3) 音楽の学習は、ふだんの生活に役立つと思いますか。

(4) 音楽の学習は、将来の生活や社会に出て役立つと思いますか。

(5) 音楽の学習は、わたしたちの生活を明るく楽しくするのに役立つと思いますか。

(6) 音楽の学習は、わたしたちの心を豊かにするのに役立つと思いますか。

(7) 普段の生活の中で歌を歌うとき、音楽の授業で学んだことを生かそうとしていますか。

(8) 段の生活の中で音楽を聴くとき、音楽の授業で学んだことを生かそうとしていますか。

① とてもそう思う Si

② どちらかといえばそう思う Penso di si

③ どちらかといえばそう思わない Penso di no

④ そう思はない No

⑤ わからない Non capisco

(3) 意識調査の結果

【小学生】 n = 78

	①	②	③	④	⑤
(1)	96%	4%	0%	0%	0%
(2)	67%	29%	4%	0%	0%
(3)	23%	50%	27%	0%	0%
(4)	33%	33%	25%	9%	0%
(5)	73%	23%	4%	0%	0%
(6)	54%	38%	0%	4%	4%
(7)	88%	4%	0%	8%	0%
(8)	58%	34%	4%	0%	4%

【保護者・教師】 n = 39

1	92%	8%	0%	0%	0%
2	85%	15%	0%	0%	0%
3	69%	31%	0%	0%	0%
4	69%	31%	0%	0%	0%
5	92%	8%	0%	0%	0%
6	69%	31%	0%	0%	0%
7	38%	46%	8%	8%	0%
8	38%	38%	8%	8%	8%

小学校における1、については、日本では42.2%が「そう思う」であるがイタリアでは96%と非常に高い数字である。2、についても日本では41.2%が「そう思う」であるがイタリアでは67%と高い数字である。3、6については同じような値である。音楽の良さを実感している。7、8については、日本では低い値であるが、イタリアでは7は、88%、8は58%と高い値である。授業で学んだことが生活と密着している様子がうかがえる。

保護者のデータは、小学生との比較を試みた。2から5は小学生よりもかなり高い値であり、音楽が生活を明るく豊かにするという思いは強い。7、8については低い値となっており、学校での音楽教育に物足りなさを感じているのであろうか。今回の意識調査の対象人数は少なく、一部を除いて、ピステッリ校のデータであるため、イタリアの状況と言えるものではない。しかしながら、イタリアにおける音楽教育に対する意識の一端はうかがえるのである。

5. 現在のイタリアの音楽科教育

(1) 小学校の音楽科教育

ピステッリ国立学校は、小学校40クラス、幼稚園7クラス、生徒数計1055人から成り、敷地は離れているが、系列校の中学校・高等学校もある総合学校である。隣の敷地には地域の中学校・高等学校があり学校の施設や設備を共有している。これは予算面での措置のようである。

ピステッリ小学校のカリキュラムでは、音楽は週1時間である。基本的なプログラム（カリキュラム指針）はあるが学校に任されており、学校独自に行っている。音楽室はなく、多目的ホールにピアノが置いてあるため、使用する時もあるが、普通教室で行うことが多いようである。普通教室にピアノ等鍵盤

(図1) ピステッリ小学校のカリキュラム

教 科	一年生	二年生	三年生	四年生	五年生
国語	7	7	7	7	7
歴史、地理、市民権と憲法(道徳)	3	3	3	3	3
数学	6	6	6	6	6
科学	2	2	2	2	2
工学	1	1	1	1	1
外国語	2	2	3	3	3
美術	2	2	1	1	1
音楽	1	1	1	1	1
体育	1	1	1	1	1
宗教	2	2	2	2	2
総合時間数	27	27	27	27	27

楽器は置いていない。

授業では、音楽全般の説明として歴史、文化、基礎基本事項などを行う。発声・歌唱など音程を身に付けられるよう指導し、階名の指導は行われていない。また、発声・歌唱など、指導法としては音を注意深く聴かせ、同じような音を出させ、音程を身に付けられるよう指導している。特定の力をつけたい場合は、一般的には各家庭で、さまざまな楽器など個人レッスンを受ける。地域にレッスンを受けられる場は多いのである。また、専門的な音楽指導を行う音楽高校がある。音楽院など、コンセルヴァトワールは充実している。

日本では、音楽の授業の指導者は、地域により特色があるが、主に小学校の低学年は学級担任、中・高学年は音楽専科教員が行うが、音楽の専門の資格を持つ者が必ずしもいるわけではなく、一般の教員が全学年の音楽指導をする。しかも教員採用試験に音楽実技は無く、基本的に大学の教職のカリキュラムに音楽は含まれていないということであった。

(2) 中学校の音楽科教育

小学校と同じく、基本的なプログラム・ガイドラインはあるが、学校（各先生）に任されているので、学校独自に行っている。やはり音楽室はない。多目的ホールを使用する時もあるが、普通教室で行う。普通教室にピアノ等鍵盤楽器は置いていない。パート練習は取り組みにくいと、斉唱（白の合唱と呼んでいる）の練習をさせることが多い。先生方は合唱は一体感や連帯感を持たせる活動であると実感している。

学校では、歌詞と楽譜が一致するよう階名を指導する。歌唱・器楽は小学校で専科の教諭に学ぶわけではないので、学校によっては、一から指導しなければならない面もある。目標は自分で音符が読め、歌えるようになることであり、自立できるよう指導している、ということであった。

残念ながらオペラは学校教育では注目されているわけではない。歌唱では年齢的にまだ無理があるため、本格的な発声は行わない。音程の指導は音を注意深く聴かせ、自分の声を正す、という方法で行っている。

中学校の音楽はカリキュラム指針では2時間となっているが、この系列中学校では音楽の研究指定を受けているため音楽をプラス2時間とっている。午前中に正規の2時間の音楽の授業があり、音楽理論、歴史、鑑賞、作曲、器楽、歌唱の基礎などを行う。午後、選択2時間では、バイオリン、フルート、ピアノ、ギターの個人レッスンとオーケストラのレッスンを行っている。これらのレッスンには希望者が多く、学校入学の際、選考を行っているようである。

クラブ活動は午後実施することができる。学校長が教育委員会に申し出、認められると予算配分があり新年度から実施することができるのである。一方、これまで実施しているクラブは継続しやすいようである。この学校では合唱部は長い歴史があり、活発である。教師の報酬は授業に対してのみであり、クラブ活動は他の専門家がやっている。

6. 考察とまとめ

歴史的に西欧の音楽文化の中心であったイタリアでは、どのように歌唱・合唱をはじめとする音楽科教育に取り組んでいるのか。イタリアと日本の学校音楽科教育の比較を通して示唆を導き出すことを課題とした。

ベルカント唱法の発祥地であり、脈々と受け継がれている音楽文化に満たされているイタリアではあるが、現在の音楽教育環境は決して良いとはいえない。小学校では音楽の専門の資格を持つ者が必ずしも在籍するわけではなく、一般の教員が音楽指導する。一方、小学校教員採用試験に音楽実技は無く、大学の教職のカリキュラムにも音

楽は含まれていないことが多い。

音楽を学習する場所として音楽室やピアノの設置状況など、日本に比べると学習環境は良いとは言えない。情報機器が発達し、イタリアでは2004年頃から、生の音に代わってコンピュータの導入がある。経済的な面もあろうが、もはや、ピアノ等の楽器での授業は必要ないのであろうか。コンピュータ活用等、工夫しながら授業展開がなされていた。日本では小学校の音楽専科は十分ではないが配置はある（学校規模・地域差はある）。また、施設・設備等でも恵まれている面がある。そういった意味で、与えられている学習環境を十二分に生かし、より音楽活動を豊かなものにしたいためである。

授業内容面では、音楽の基本事項に時間を割いている。歌唱面では小・中学校ともに、教師の声、仲間の声、CDによる専門家の声など、注意深く「聴く」ことに力を入れ、良い声づくりとともに音感をつけようとしている。発声指導においては小学校では日本で行われているような指導法であり、中学校でも本格的な発声法は年齢的に無理があるということで、行われていない。合唱も取り入れているが、設備等の関係で斉唱を行うことが多いようである。発展的な活動はクラブ活動や、個人レッスンで行うようになっている。

学習環境等で不十分な面はあるが、音楽教育に力を入れようとする学校は教育委員会に申し出をすることにより、プラスの授業時間と専科教師の派遣がある。また、プロジェクト（総合表現活動）の申し出も同様である。調査校は特別配置のある学校であった。そういった柔軟性のある対応の中で、音楽科教育を、より充実発展させていく道はある。イタリアでは、かなり以前から学校教育に外部の専門家が入ったり、地域に出て（音楽ホールなど）学習するシステムが定着している。保護者・地域の理解、支援があり、年何回か行われている。また、国のカリキュラム指針はあるが、学校の裁量に任されており、地域や学校によって、教育力の差がでると危惧されている面もある。しかしながら、教育現場での発案、決定、校長の公的機関への申し出、採用されたら予算が計上され実施、といった運びで各学校が、特色ある独自の教育活動が実現できる仕組みとなっている。こういった中で、子どもたちの主体性や創造性が育まれていくとも言えるのである。

在イタリア大使館一級書記官との対談の中で、イタリアでは長い歴史の中で、地域環境に教会音楽や、コンサートの催しなど、音楽に触れる機会は多くある。また、音楽院など専門教育機関が充実しているのである。そういった中で、イタリアの特色として、一般の学校教育の目的は、音楽そのものを教育することではなく、精神教育、コミュニケーションの手段となることが多い、とのことであった。

明治以来、日本は学校教育において他国の学問・文化を摂取することに力を入れてきた。しかし、現在は日本から発信することも少なからずあると言える。音楽科教育もしかりである。日本とイタリアの音楽科教育を比較検証し、相違点を見つけ示唆を得、課題を持ち発展させていくことができるのではないかと。

今後、イタリアの歌唱活動をはじめとする音楽科教育に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法の開発を進めたい。また、音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、音楽科教育を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）開発も視野に入れていく。

梶田叡一氏は、「現在の教育で決定的に不足している人間的成長の面を重視していくこと」の大切さを述べるとともに、人間教育の総括的な目標の中に「成長発達の問題点である感性の未発達において」を指摘している。⁸⁾心の豊かさや、情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく大切さとともに、学校教育における音楽科の果たす役割を強く実感している。

今、日本の教育界では学習指導要領改訂の準備が進められ、学力向上ということで英数理が重視されている。人が人となるための基礎基本としての芸術教育が、独立した必修教科であり続けた意義を再確認し、芸術教育の重要

性が忘れられることのないよう、音楽科改善の視点から、さらなる充実をめざさねばと考える。音楽は生涯にわたって人生を充実させるものである。音楽の世界を幅広く考えていくと、音楽教育は、新しい時代の協調的な学習やコミュニケーション能力を養うなどに適していると言える。歌唱活動をはじめとした学校音楽科カリキュラムに注目し、日本で根付いてきたカリキュラムを、文化遺産の豊富なイタリアの教育から検討することで、より良い音楽活動を創造する機会としていきたいと考えている。新しい音楽科のカリキュラムを積極的に考えていく時期である。

しっかりとしたアートの伝統が国の基盤を支えているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出したいと考える。

引用・参考文献

- 1) 「音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較」日本学校音楽教育実践学会 音楽之友社 2012
- 2) 大野内 愛「イタリアの小・中学校における音楽科教育の変遷 —1894年から現在までのプログラムに着目して—」広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部 第61号 2012 333-342
- 3) 外務省 諸外国・地域の学校情報 国・地域の詳細情報 (平成25年3月更新情報)
- 4) 同上
- 5) 「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」2012年9月版 教育省
- 6) 「うたうこと」フレデリック・フースラー、イヴォンヌ・ロッド=マーリング=著 須永義雄、大熊文子=訳 1991 音楽之友社 p108
- 7) 文部科学省国立教育研究所 平成20年度「特定の課題に関する調査」—小学校音楽・中学校音楽—
- 8) 梶田叡一「人間的な教育とは何か」教育フォーラム第4号
 - ・梶田叡一 「基礎基本の人間教育を」金子書房 2001
 - ・梶田叡一 「生きる力の人間教育を」金子書房 1997
 - ・瀧明知恵子「新学習指導要領における音楽科教育～音楽教育に献身してきて思うこと～」教育フォーラム特集50号特集<やる気>を引き出し育てる 人間教育研究協議会 金子書房 2012
 - ・瀧明知恵子「新学習指導要領における音楽科教育～音楽教育に献身してきて思うこと～」教育フォーラム50号特集<やる気>を引き出し育てる 人間教育研究協議会 金子書房 2012
 - ・瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ ～歌唱活動に注目して～」教育フォーラム56号 特集<アクティブラーニングとは何か>人間教育研究協議会 金子書房 2015
 - ・大野内 愛「1920年代のイタリアにおける小学校唱歌教育の特質—「1923年のプログラム」と小学校唱歌指導者(1924)の分析をとおして—」『音楽表現学』vol.9 日本音楽表現学会 2011